あなたが奇跡を信じないなら

イングリッド・ロレマ

親愛なる (HNS) 人間自然科学研究所の小松昭夫理事長、並びに研究所の皆様、島根県、松江市の小松電機産業株式会社が主催する『出雲から日が昇る』シンポジウムにお招きいただき、光栄に存じます。

会場においでの皆さま、本日はご参加いただき、ありがとうございます。皆さまのご期待に応えたいと思っております。

美しい日本に初めて参りましたが、すでに、この目の映るものは、私の心を魅了しております。景色、人々の立ちい振る舞い、感動を与える豊かな文化、歴史などいずれも、私にとって心の琴線に触れるものばかりです。

今回お招き頂きましたので、日本について学ぼうと思い立ちました。ここにおいでの皆さまこそ、すでに、この私にとっては、神様からの贈り物だと思っております。そう申し上げるのは、日本とオランダの歴史的関係について学校で学んだこと覚えているからです。真っ先に浮かぶのは出島という地名です。長崎港の出島です。1641 年から 1859 年まで続いた日本とオランダの貿易のため、築造された人口島です。当時オランダは西洋諸国の中で、日本が交易をする唯一の相手国だったと学校で習いました。1641 年に 6 隻の船が日本を目指しました。24 名の船員を乗せた 1 隻だけが、無事到着しました。その船の名前は、‘Ｄｅ　Ｌｉｅｆｄｅ’、『愛』という意味です。船名が『愛』とは、なんと幸先の良いスタートを切ったことでしょうか。

このシンポジウムでは “The Eternal River（悠久の河）” という哲学的視点が貫かれています。例えば、周藤彌兵衛の生涯は、みごとにそれの視点を象徴しています。周藤彌兵衛は、流域の村落を守り、村民の子孫の将来まで考えて、河の流れを変えるなど、治水に全生涯をかけた人物です。河筋を変える構想はオランダ人にはよく理解できます。私達オランダ人は何百年もの間、河川と海の治水に知恵を絞ってきたからです。ちなみに、ほとんどのオランダ人は海抜ゼロメートル地帯に暮らしております。

ここで、私が生まれ育ち、今暮らしている土地がどのようなところか、写真をお見せして紹介したいと思います。水流、泥沼、海、そして河川。申し遅れましたが私は、イングリッド・ロレマと申します。オランダ人のビジュアルアーティストです。オランダはデルタ地帯に位置し、国土は、起伏がまったくない平坦な土地です。二本の大河が長年にわたり流域に沈泥（シルト）を堆積しました。実は、このオランダの河川がもたらす粘土こそが、私の夢を実現させた素材なのです。イタリア人は、山肌に覆われた大理石を掘り出し、その大理石を素材とした彫刻作品を制作しましたが、私は、土壌として食糧生産に欠かせない粘土を使って、彫刻作品を制作します。世界に存在する素材の中で、粘土ほど、文化の歴史と密接にかかわってきた素材は他にありません。粘土は、有史以前から現在まで、文化を可視化するために使われてきました。洞窟の壁画、最新モデルの車のエンジンまで。私の夢はこの最古の芸術的素材と現代のデジタル世界を結ぶことです。ヨーロッパの中央部を水源とする河川が、私の暮らすオランダのデルタ地帯に粘土を堆積します。実はこの粘土が、芸術作品に形を変えて日本にもたらされようとしています。作者として皆さまに感謝いたします。悠久の河は、実はどこにでも流れていくのです。皆さまと私は文化的背景が違っても、思いは一つではないかと考える次第です。

空を見上げると満天の星が輝いています。しかし、それらの星は何光年のかなたにあった、つまり今はもう消滅してしまっている星かもしれません。それでもなお、現実の星として煌めき続けるのです。足元の地面に目をやります、するとその下には、私の過去が隠されたままです（眠っております）。現に私は土に触ることができます。しかし、その下に埋もれた過去については、たった 1 ミリでも触ることはできないのです。立っている地面を見つめても私には、土しか見えません。すべて覆い隠されているからです。

オランダは小さい国です。人々が自宅で宗教的儀式をする際に使うオルガンの製造工場を改装して、私は自分のアトリエにしました。そこを、たまたまショールームにしました。このショールームからすべてを始めました。なぜならここで私は、素描から彫刻作品の制作まで作業をすべて行うからです。ですからここは、夢が生まれる場所だと申し上げることができます。何故なら…そう、夢を信じない人にとっては、現実にはそんな場所はないと思えるかもしれません。でも、このアトリエで、私は作品を制作しています。

小松社長の著書を拝読し、また人間自然科学研究所が、国際平和の分野でこれまでどれほど尽力してこられたか学びました。あなたが平和を語られるとき、平和は、和（ハーモニー：調和）の延長線上に見いだせるものと考えていますね。

調和という概念は、その人の経験によって変わると思います。西洋よりアジア地域により深く根ざした概念です。皆さまの国と同じように、ヨーロッパの歴史は、果てしない闘争と最終的に二つ戦争を起こしたように、まさに殺戮の繰り返しだと言えます。それがどれだけ悲惨な結果をもたらしたのでしょうか。たとえば、第２次世界大戦により、詩人は詩を書く意欲を失い、彫刻家は美を追い求める創作意欲を奪われました。芸術界は、まるで四肢麻痺になったかのごとく、創作活動を停止しました。

前世期を振り返ると、芸術は急速に変化を遂げたことが分かります。芸術家はかつて、教会や王族や、権力者らのお雇い作家として創作活動をしていました。しかし現在は、みずから目標を選び、意見も堂々と述べます。私達は、芸術家の卵たち (学生) に研究するように指導します。また、有意義な人生や有意義な作品を模索するように励まします。つまり現代の芸術家は、独立心旺盛で、自分たちで考え、自説を擁護するために立ち上がるような教育を受けています。

ここにお集まりの皆さま、私たちが日々努力しているのは持続可能な未来を創るためではないでしょうか。それは明白なことですね。そうであれば私達はまず、自分たち自身や若い世代を教育することから始めねばなりません。このシンポジウムはタイトルは『出雲から陽が昇る』ですが、持続可能な将来について私なりの考えを話したいと思います。平和な未来について、また、社会における芸術の果たす重要な役割についてです。

最初に質問をしたいと思います：『どのような世界に暮らしたいですか？』
生きるには、まず安全が必要だというような心配事は、この際忘れてください。開放感を求め続けてください。不安をコントロールしてください。もし世界に、目的達成に役立つものがあるとしたら、それは、芸術です！重要なプロセスが進行して初めて、芸術は誕生します。まず人は考えます、そして想像の翼を広げます。斬新な作品を制作し、既存の流儀 (手法) を少しずつ変えていきます。私たちが創り出すサイン（象徴）は、変えることができるサインです。実際に制作することで、意欲や責任感を表現することができます。凡庸や、大衆主義や、抑制のきかない資本主義に対抗できるのは、芸術の領域においてです。学生に対してする私の質問の中で最も重要な問いは：
『芸術家として、どのようなイメージの世界を描きたいですか？あなたが守るべき価値観は何ですか？どのようなイメージの人類がこの世に出現するのですか？眼下の状況について、あなたが見出す可能性とはどのようなものですか？』

人は、現実に直面すると、活力を発揮し、チャンスを見出し、それまでは浮かばなかったアイデアを着想するものです。国境が消えるところでは、地平線が見えてくるものです。皆さま、ここでお伝えしたいのは、芸術により、徹底して解き明かすことの重要性です。新しい視点を見出し、新しい可能性を創り出すことです。これこそ、まさに、将来を開拓するという意味なのです。作品を見せることにより、私は自分が伝えたいことを明確にしているのです。

芸術作品は、作家の考えと見方が結実した成果物だと思います。別な言い方をすると、あるアイデアが生まれると、芸術家は、彫刻や、

絵画、またはフィルムという形で具現化するのです。私にとっては、彫刻作品を制作することは、つまり、考えを素材に練りこんで、見る人がわかるように、形のあるものに変えて、可視化することなのです。私が、materialistic thought（物質主義な考え）と言うのは、芸術作品が、その芸術家の考えと素材を一体化した成果物であるとういう意味なのです。

私への質問は、当該地域で、皆さまがより維持可能な平和を実現するために、芸術が具体的に貢献できることは何かということでした。私の返事はあくまで外部者としての視座に立つものです。これまで 20 年間の以下の二通りの事業を実践してきました：
まずその１、「The Theatre of Wrong Decisions(誤った決断の劇場)」を創設。その２、芸術を通じて戦争のトラウマに陥った子どもたちが暮らすガザ地区の難民キャンプでほぼ２０年間活動。

同僚、Willem Vugteveen と私は、パレスチナのガザ地区に Holland Office for Personal Encouragement、ＨＯＰＥ (個人的に励ますためのオランダ事務所) という名前の基金団体を設立しました。ＨＯＰＥを通じて、公開スタジオを設置することができました。このスタジオでは、３６０人が、毎日、支援を受けることができます。芸術と文化の分野で、レッスンを受けることができます。ＨＯＰＥ基金は、「障害を負った子どもを含む」トラウマを抱えた子どもたちが、自分たちにとって意味ある人生を送れるように励ますことを目的として設立しました。子どもを観察し、セラピーを受けさせることもあります。悲しいことに戦争は繰り返され、心にトラウマの傷を負った子どもがいない世界は、いまだに実在しません。戦火のマイナス効果を縮小し、また、子どもたちが意味のある人生を送れるようなプロセスで、私達は尽力したいと考えております。『公開スタジオ』で、芸術のレッスンをすることで目標を達成したいと考えております。芸術が子どもたちの想像をかき立て、知力を研ぎ澄ませ、心を癒します。自尊心と自信をもてる状況を創りたいと思います。このような活動により、自分たちは安全な状況で暮らしているという安心感をもつようになり、子どもたちの恐怖感も軽減されます。自信と自尊心は、人生で前向きの選択をする姿勢を育みます。ＨＯＰＥ基金は、社会とのインターフェイスとして機能し、子どもたちの両親の参加も促します。過去７年間、ＨＯＰＥは、オランダ赤十字社と協働してきました。オランダ赤十字社が財政面の責任を負っております。

６年前、私は、もうこれ以上黙ってみていられなくなりました。それまで１０年以上残酷な現実をただ見てきましたが、アクションを起こさずにはいられなくなり、活動を開始しました。バグダッドでヘリコプターが撮影した殺害のフィルムを見ました。また、ガザ地区では、大規模爆撃により、１４３０名にものぼる犠牲者がでたことを知り、いてもたってもいられず、活動を始めました。ある日、報道番組を見ていたら突然、米軍が、武器をもたない一般市民に向かって発砲したニュースを目にしました。それは、ただ、報道人（レポーター）たちが、移動している一場面だったのだと後で知りました。しかし、その時、ニュースで聞こえたのは大変残忍な言葉でした。たとえば、『そこで死んでるやつらを見ろ』と誰かがいうと、パイロットが、“Nice!” と返事をしました。（訳者注釈：Nice とは英語で、素敵、すごいという意味の言葉であり、ロレマさが、犠牲者をみて、Ｎｉｃｅというような言葉をパイロットが言ったことに反発する気持ちがこの文章の言外に感じられます。）！このビデオを見て、私は激高しました。これがきっかけとなり、Cast Lead の事業を私は開始しました。添付の写真を見てください。http://www.youtube.com/watch?v=5rXPrfnU3G0
(訳者注：アムネスティーインターナショナルからも Cast Lead の闘争については、ＰＤＦで写真がネットで公開されています
http://www.amnesty.org/ar/library/asset/MDE15/015/2009/en/8f299083-9a74-4853-860f-0563725e633a/mde150152009en.pdf)

最初に、「The return of the Ghosts(幽霊の帰還)」と題した作品を完成しました。この展示には、２００８年に爆撃で亡くなった犠牲者を象徴するように、パレスチナの土壌から作った粘土を基に制作した１４１７体のフィギアーが含まれています。「The return of the Ghosts(幽霊の帰還)」は、すばらしいプロジェクトになりました。南アフリカ、アフリカ、中東やヨーロッパから活動家が集まり、知識を共有し情報交換しました。ストーリーや政治的見解を聞くために私達は、議会まで彼らを連れていきました。そして同僚のオランダ人デザイナー Guus Boudestein に、芸術作品と評されるような本をデザインするように頼みました。彼はみごとに達成しました。どの本も爆撃の犠牲者を象徴しています。どの本にも犠牲者の氏名が記されています。ですから、ユニークそのものです。全部でパレスチナ人１４１７名、イスラエル人１３名の名前が記されています。ベルギーのブリュッセルにある美術館に、この巨大な展示を置きました。５日間だけで、２３，０００人が来ました。私達５人も、展示作品の一部として会場にいて、５カ国語で来館者とディスカッションをしました。その時のフィルムをお見せしましょう。

芸術の分野で少しでも平和に貢献したいと願って実施した２つ目の事業は、「The Theatre of Wrong Decisions（誤った決断の劇場）」です。この事業では、過去の視点で現在についてコメントしたいと考えました。私たちのセリフはシェークスピア作品と関連しています。シェークスピアは４００年以上前に脚本を書きました。２０００年遡ってインスピレーションを得ました。例えば、シリアに関して私たちが制作したフィルムは、シェークスピアのマクベスの文章を引用しています。『アラビアの香水がすべてこの小さい手に付けたら、甘い香りがするわけではない』というセリフは、マクベスが、無分別で理不尽な暴力行為を行うようになったときのセリフです。究極的は残忍さと流血の狂気を表現しています。オランダ国家劇場の哲学者や脚本家が、シェークスピアの作品や正しい引

用文について情報をくれました。現在制作している２つ目のフィルムは、Lampedusa の島です。これは、波に砕かれて粉々になる粘土でできた頭部を描いています。「The Tempest(大嵐)」から引用しました。

『間違った決断の劇場』
南アフリカの芸術家、William Kentridge は、同じ分野で精力的に活動してきました。彼の作品中、歴史的な起点と評される作品は、『Black Box　(ブラックボックス)』です。Kentridge は、アフリカにおけるドイツの植民地主義を主題としました。　特に、(現在のナミビア) 南西アフリカの Heroro 族の虐殺を取り上げました。虐殺の歴史的事実は、Kentridge が有するアイデンティティを刺激して、彼に、状況、複雑性、対処プロセス、悲哀、和解について自問自答させました。Kentridge は「Black Box」を「Trauerarbeit」と呼びました。例えば、親戚を亡くした場合など、積極的にトラウマを軽減することにより、失ったことに伴う辛さに対処することが可能であるというフロイトの概念に言及しています。

中国人の Ai Wei Wei は、勇気を敬愛する芸術家です。Ai Wei Wei はオランダ同様日本でも有名だと思います。

参加者の皆さま、すでに第２次世界大戦と、ヨーロッパで第２次世界大戦後の市民生活についてはお話ししました。報復がない社会はどのようにして構築したらよいのでしょうか。私が思うには、ドイツは永遠に謝罪し続けることが非常に大事です。Windergutmachung（償い）と呼ばれる事業が始められました。ドイツが過大な損害を与えた場所で、ドイツ人市民ボランティアたちが復興 (賠償) 事業に関わっているのです。これは、ドイツ政府が支払った賠償金とはまったく別の事業です。今日でも、若い世代に、戦争、平和、共生のメカニズムを教える事業があります。ここで、私のパーソナルストーリーをお話ししたいと思います。

私が６歳で学校に通い始める頃のエピソードです。父は、書棚から『地図を持ってきて』と言いました。私を膝にのせて、ヨーロッパの地図を見せてくれました。『ほら、Ingkie、このちっぽけな国が、私たちが住むオランダという国だよ。この大きい国が、ドイツだよ。直に Ingkie は小学校にいくようになる。他の人が、お父さんたちの家庭教育についてとやかく言ってくると思う。』
戦争はすでに１４年前に終わっていましたが、それでも、人々の心に大きな爪痕を残していました。　『教室にいるとき、先生やクラスメートが「Krauts（ドイツ人を軽蔑する言葉)」について話していたら、お前はすぐに立って、教室を出て、家にそのまま帰りなさい。私達は、友達になるためにできることは全部する必要があるのだよ。』と父が言いました。戦争中、３か所のキャンプを経て生還した父は、自分の子どもには、報復の気持ちを胸に、学校生活を始めさせたくなかったのでしょう。思い返すと父のこの態度を知って以来、父は、私のヒーローになりました。父は、私達子どもに、誰にでも心を開き、限りない自由を謳歌して、人生のスタートを切らせかったったのです。父は、人は一人では生きられないと理解していました。私達は、こうして新しい時代を迎えたのです。

小松社長、今お話しした父親と子どものスト―リーは、あなたのストーリーと重なるのではないでしょうか。あなたの言葉を借りれば、「衣食住などの基本的産業においては、労働者は世界から来ており、互いに依存しなければ、生活がなりたたない。つまりもう後戻りできないところまで到達している。」ということになります。ゴールに到達するため、あなたはいろいろな手法を駆使します。私はあなたが芸術も、その手法に加えている点に大きく心を動かされました。理由を説明しますね。もし芸術が固定概念だったら、彫刻の機能はいったいなんでしょうか？彫刻は、一度制作すれば動きません（つまり静的です）。しかし同時に、彫刻は、考えたことが連続し、結び付くことから生まれる成果物でもあります。もし、概念の本質が目に見えて、かつ普遍的であれば、たくさんの書物を読みあさるより、芸術作品のほうが、より包括的であり、かつ、より深い洞察力を、またたく間に、人々に授けることができます。一目見ただけで、芸術作品は、まず、人の心をつかみます。しばらくして、脳を刺激します。もし、観客の心を動かせるなら、その人を、特定の行動に走らせることも可能です。観客は、行動に駆り立てられるかもしれません。それが、まさに、あなたが人間自然科学研究所によって成し遂げようとお考えになっていることですね。人類が平和のために活動し、望ましい将来をイメージし、熟考することを望んでおられますね。あなたは、積極的な態度を望みます。あなたの夢は、核を保有する３ヵ国が出会う日本列島と韓国半島で、歴史上初めて、人類の発展にとって共感の段階を構築することです。アメリカの『スマートパワー』、中国の『和諧』、韓国の『和諍』、日本の『和譲』から得た教訓によって達成できると信じておられますね。沖縄に３つ施設を有するセンターを置き、恒久的な平和の島にすることもあなたの夢ですね。

同時性がキーワード。
オランダでは、同僚と友人の Guus Boudestein が同じ分野で活動しています。彼は、Design Thinking(デザインを考える) と名付けたデザインスタジオのメンバーです。また、軍縮に関する博物館の建設事業計画も推進しています。

Guus プラン
さていよいよ、なぜ本日、私が登壇しているのか、その理由を話すときがきました。昨年、カーネギー財団が、ハーグにある平和宮に、100 年記念祭を記念して、Bertha von Suttner(1843 年〜 1914 年）の彫刻を建立したいと考えました。そして、私に制作を依頼しました。私にとって人生を変えた出来事についてお話ししましょう。いい彫刻を制作するために、彫刻家である私は、本題にのめり込む必要があります。このため、Bertha von Suttner の本の出版者である Marianne Kleijwegt と私は、Bertha の人生をたどり、彼女が暮らした重要な場所を訪ねることにしたのです。

Bertha von Suttner が生きた時代、彼女は世界で最も有名な女性でした。彼女は、作家であり、平和の活動家、ノーベル賞の最初の女性受賞者です。Andrew Carnegie の財力で建設した平和宮で、彼女の果たした役割は、母親のように精神的に支えることでした。彼女が執筆した、Die Waffen nieder!(武器を捨てよ！ 1889 年) は、歴史上初めて、普通に暮らす人々の目線で戦争について書いた本です。当時、同世代の間では、戦地に行くことは、名誉であり、勇ましい行いであるといった見方が大勢を占めていました。しかし、彼女は、それに異議を唱えました。そのことが、前代未聞の大規模な平和運動へと発展しました。Die Waffen nieder!(1859)

この戦いの翌日､大量殺戮の現場を目の当たりにした Henry Dunant は､すぐに赤十字社を設立しました。Goya(ゴヤ) はスペインのアトリエで戦争の脅威を描きました。

多くの人が思い思いに活動しました。事実、30 年間に、ヨーロッパ中で、活動する地域こそ違いましたが、人々は、似たビジョンを抱き、互いの活動内容を見て、参考にしてきました。ところで、皆さんに、質問があります：広範囲で集団的に通じる考え方は存在すると思いますか？

私達が旅行に出かける前、国務大臣の Peter Kooijmans がアトリエを訪ねてきました。Kooijmans は、オランダの外務大臣であり、8 年間にわたって平和宮にある国際裁判所で判事を務めた人物です。彼と私は、この彫刻を制作する際、唯一意義のある命題は何かを議論しました。「この女性が現代に生きたら、誰になるだろうか？」がその命題であるとの結論に達しました。グリーンピースの活動家？いいえ、では国際アムネスティの人？　はい、でも彼女は受け入れられるでしょうか？いいえ、全面的武装解除という彼女の主張は、現在でさえ、あまりに革新的といえます。Kooijmans の訪問時にいろいろ話しているうちに、ひらめきました。今まで探し求めていたものを見つけました。一生に一度のチャンスだと感じました。私が、創造するのは、19 世紀の女性ではなく、ここに今生きている女性・・・賢く、プライドをもち、熱意あふれる、知性豊かで、粘り強く、クリエイティブで、しかし、同時に、芯の強い女性。闘うべきときには、持てる術をすべて使い自ら闘う女性。全て。彫刻はそういう女性を鼓舞するでしょう。

2013 年、2 月、ドイツの都市 Columbarium にある、Bnertha vo Suttner が眠るお墓まで車で向かいました。オランダからもってきた花束を供えました。ヨーロッパでも大きな都市として知られる Prague は、彼女の生まれ故郷です。その Prague に向かいました。彼女の人生は、まるで小説のようでした。彼女は、Kinsky von Wchinits und Terrau という貴族階級の軍族の出身でした。父親は､彼女が生まれる前に亡くなりました。母親は､ギャンブル好きで､Bertha の遺産をギャンブルにつぎ込みました。婚期がきて､3 人の王子が求婚しましたが、彼女は、養われるのを嫌い、自活する道を選びました。彼女のような上流階級の女性にとっては、このような生き方は稀有でした。でも、これこそが、彼女の最初の抵抗だったのです。

Baron Von Suttner の屋敷で仕事を見つけました。家族は大反対しましたが、でも、Von Suttner 家の息子は、7 歳も彼女より年下でしたが、二人は恋に落ちました。状況が絶えがたいほど悪化したので、パリに向かい、Bertha は Alfred Nobel（ノーベル賞の創設者）に雇われることになりました。彼は､駅に降り立った Bertha を見た途端､余りの美しさに一目ぼれしたそうです。つい礼儀作法を忘れ､

ただ恋心から、後に言い伝えられることになった有名な文句、「マダム、あなたさまのお心はまだ自由でしょうか？」を口にしました。彼らが一緒に働いた年月は短く、Bertha は、まもなく、ウィーンに戻り、Arthur von Shuttner と秘密裏に結婚しました。Alfred Nobel は、名誉に値する人物であることを自ら証明しました。Bertha と彼は、人生の友であり続け、彼は、彼女を財政的に支援し続けました。二人（Bertha と夫）の親戚は怒り、追放しました。コーカサス地方に家を構えました。そこで、ロシアとトルコ戦争の悲惨な光景を目の当たりにしました。Bertha は彼女自身の目で戦争の屈辱と破壊を見ました。これに反発して、彼女は、Die Waffen Nieder! を執筆しました。これが、彼女の二度目の抵抗です。

Die Waffen Nieder! は、オーストリアとドイツで最終的に出版されました。大好評を博し、16 カ国語に翻訳されました。平和運動は、ヨーロッパの各地で次から次に起こりました。歴史上に最初で最大の平和運動が起こりました。ダーウインの進化論からヒントを得て、Bertha は人類も変化をすると考えました。政府が市民を操り、扇動し、戦争に駆り立てる心理学的手法を学びました。彼女の分析能力は、剃刀の刃のように鋭く、挑戦的で、現代でも通用すると思います。

Bertha は、Alfred Nobel に平和運動を支援してくれるように頼みましたが、彼はその都度断りました。それは理解できます。ダイナマイトの発明家として Nobel は戦争から利益を得ていました。しかし、Nobel が 1986 年 San Remo で亡くなる直前、Nobel 賞の受賞者の条件を、遺志として、遺書に書き残していたことを Bertha は知りませんでした。

海洋を挟んだ片側では、Carnegie と言いう名の男性が、その責任を負いました：『Alfred Nobel が亡くなった今、地球上でもっとも裕福なのは、この自分である。』『だから、よりよい世界に導く運動を支援する責任は、自分にあると思う。』と述べました。Bertha von Suttner はその言葉を聞きつけて、C arnegie に会うために、アメリカに向けて船に乗り込みました。Andrew Carnegie の孫にあたる Linda Thorell Hill から、像の除幕式のときに、祖父と Bertha が友人であったと聞きました。Bertha こそが、カリスマ性を堅持し、人々を魅了するハーグの国際司法裁判所を建造するよう説得した人物だったのです。
「この建造物は、新しい時代の象徴となるでしょう。今後、国家間の相違は、関係者の利害を超えて、司法の力により、解決されるでしょう。戦争は、どうしようもないほど旧態依然としており、新世界ではもう必要はないのです。　今日、平和はホット（あつい）ものなのです。Bertha は平和宮を考えだしました。それを建造したのは、Carnegie です。

この像を完成するまでの歩みを旅行に例えると、道のりは険しく、崩れやすい道でした。まず、彼女自身の書物からとった紙を使いました。紙を重ねて透明な液体を混ぜると固くなりますので、それを素材として使えるようになりました。実は、実験的に工夫したのですが、試してみてとてもよかったと思いました。このようにすれば、多くのものをリサイクルできますし、すべての用途に応じて素材を使い分けることが可能になるからです。

制作委員会は私のアイデアを否定しました。彼らは、Bertha を老女として像を制作するように言いました。私はそれを嫌いました。30 代 40 代の彼女は、創造力が最もさえ、執筆する本は、どれも発想が斬新でした。私は彼女のこの創造力の旺盛な点を見逃してはならないと主張しました。それが、若者世代を刺激するのです。残念ながら、この点について歩み寄ることはできませんでした。ですから、意見の食い違いがあり苦労しました。私は不眠に悩みました。もし彫刻制作委員会の代表者の言うとおりに制作すれば、この像の意義が失われると思いました。そこで、私は、リスクを冒しても自分が正しいと信じることをすると決めました。彼らが拒否すれば、大変なスキャンダルになり、最悪支払いをしてくれないかもしれない。他方、もし、意味のない彫刻像を制作したら、もっと悪い結果になると思いました。それで、除幕式の時、平和宮の理事の横に直立しておりました。なぜなら、彼が像を見て激怒すると思っていたからです。ところが、彼が像を見たとき、視線をこちらに向けました。そして、驚いて、こちらに身体を寄せて、「あなたが私達の意見に従わなかったので、かえってよかったと思いますよ。」と言いました。

除幕式の前日、シティーホールに座っていました。ロープの切れ端を忘れてきたから隣人が届けてくれるのを待っていたのです。座っている間に、多くの人々が往来しました。突然、日本人の女の子が、周囲を注意深く観察しているのに気が付きました。彼女ほど、注意深く周囲を見回す人はめったに見かけないので、彼女の様子に心を奪われました。それで、私は立ち上がり、彼女に近づき、『周辺に興味があるか？』とか、『聞きたいことがあれば言ってほしい。』と言いました。すると彼女は、うなづいて、『とても興味がある。』と言いました。すぐに 6 人の女性が現れました。　『みんな日本からきたの？』と言いました。『私がこの像を制作したの。明日が、除幕式なの。本来は、幕をかけておくのだけど、日本語の文字が書かれているのを見てほしいから、特別に今見せてあげましょう。』その時、老齢の紳士が現れました。その時の私は、作業着姿で、ペンキで汚れた木靴をはいていました。その人は、スリッパのようなものを履いていました。とてもカジュアルないでたちでした。少し話して笑いました。隣人が来て、序幕の作業が終わりました。『もし時間があったら、明日公式の除幕式が開催されるので、来てください。』と言いました。その当日、その日本人一行が来ていました。皆フォーマルな服装でした。そこで、『自宅に来て、一緒に軽く夕食をどうぞ』と招待しました。友人が食事を用意してくれました。私のマンションはシティーホールの真向いにあります。バルコニーに立つと平和宮スタッフは、その日本人と顔見知りだと分かりました。

理事の一人が、『ねえ、Ingird どうやって小松氏と知り合いになったんだい？』
と言いました。 『小松さん？』『小松さんなんて知らない』『でも、小松さんはそこに立っているじゃないか』『どうやって見つけたかって？通りで会っただけ。』 皆さま、これで、お分かりですね、私たちの出会いのストーリーを。

親愛なる本日の参加者の皆さま。すでに世界は、同じ時間を共有する時代になっています。

ハーグで人々を鼓舞した彫刻が、松江でも人々を鼓舞します。
ハーグでは、若い世代が、平和と戦争について考えるきっかけを提供しました。Bertha von Stunner の像から教訓を得ることができます。ハーグは、平和と正義の都市です。すべての若者に平和と戦争について自問する責任を感じさせます。人は、いつでも、立ち上がり、社会を変えることができることを認識させます。Bertha von Stunner は、総体的な見方が存在した時代に生きました。今、私たちが自ら問うのは：今、私達も、総体的な見方が当たり前の時代に生きているのでしょうか？もしそうなら、あなたなら、どうしますか？

シェークスピアは、芸術家が、時代の真の目撃者だと言いました。しかし、芸術は、単に時代を目撃するためにあるのではないと思います。芸術は、形を変えることができます。飽くなき野望から、信じがたい苦悩まで、人の心は、変容し、表現できない感情は、それが何かも分からず、ただ人はそれを語るのです。それは、想像できないものを想像するためのメカニズムです。この点について、Albert Einstein は、『想像力は、知識よりもっと重要だ。知識といえば、知って理解していることに限られる。これに対し、想像は翼を広げて、全世界をわたり、それによって得られるだろう知見と理解に、限界はない。』と述べました。文学やビジュアルアートは、想像力をかき立てます。芸術は、良心を揺さぶります。他人の立場になってみると、破壊行為が選択肢であってはならないと分かるでしょう。敵対する人でさえも、一人の人間とし尊重することが大事です。

これまで 40 分間話したことを要約すると、世界は想像を超えて複雑化しています。質問の答えが見当たらなくても、私にはどうすればよいか分かっています：それは、教育です。
人類の将来のために、河の流れを変えましょう。それは、武装解除です。
異なる場所に暮らす人が一斉にすれば可能です。

芸術は、メッセージを伝えるためのものです。考え、イメージ、言葉、音声は，創造力を磨き、行動へと導きます。

アトリエで、Kooijmans 判事と交わした会話を思い出します。彼は、よくこういう風に考えを口にします。『あたなは、芸術とう領域で、世界の発展に寄与する名誉を与えられている。直接または、長い伝統という文脈で、あなたは貢献することもできる。(比べて、私が関係する）ハーグの国際司法裁判所は、審議が思うようにスピーディには進まないのです。なぜなら、すでに存在しない世界に対して法律を施行しないように注意を払わなければならないとか、多くの制約があるからです。』

小松社長、美しい未来に対するビジョンを持っていて、それを達成するために必要な方法を脳裏に描いているのは、世界であなた一人ではありません。しかし、あなたとあなたのチームに対して心から敬意を表します。一つ言えば、人は、夢を追い求めることから始めて、偉業を達成します。夢を達成することは、大きな円形を描き終わるようなものです。夢を信じない人は現実的ではないのです。頑張ってください。
・・・平和はかっこいい！